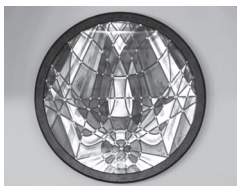
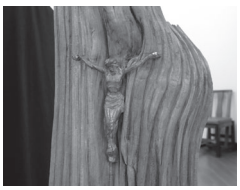
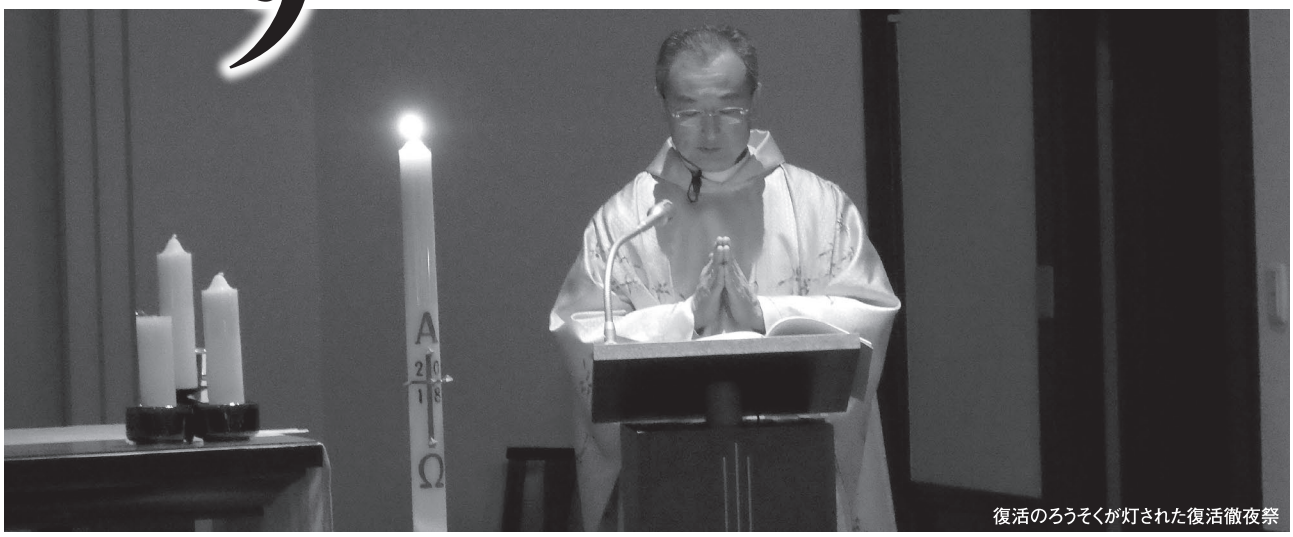
カトリック山形教会報
かすみ
5
2018.5.27





カトリック山形教会
〒990-0039　山形市香澄町2丁目11-15　TEL.023-622-3574　FAX.622-3590
ホームページ　http://www.catholic-yamagata.com/



復活のろうそくが灯された復活徹夜祭

久しぶりにお見えになられた結城珠子さんを囲んで

聖堂の入口でご復活のたまごを配る子どもたち

持ち寄りのご馳走で和やかに行われたご復活の祝賀会

復活祭は、すべての信者の洗礼記念日

わたしが洗礼を受けたのは1987年4月19日、その年の復活祭でした。当時26歳でしたが、ミサ後、多くの見知らぬ方々から祝福の言葉をいただきました。その人生初の体験が、いまも新鮮に思い起こされます。

「キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄です」（1コリント15:14）とパウロが書くように、わたしたちの信仰の土台はイエスの復活そのものです。ですから、復活祭が、信仰の恵みをいただいたすべての信者の洗礼記念日と言えるのです。

この記念日にいたるには、イエス・キリストとの出会いがそれぞれあったはずです。この出会いこそがすべての始まりであり、大切な宝物です。その出会いをもう一度振り返り、黙想いたしましょう。そして、これからの信仰の歩みを更に深めてまいりましょう。

春日和! 復活祭

すみきった青空、温かな春の日差しが注がれる今日4月1日、聖堂一杯の皆様を迎えて復活祭ミサが行われました。今年は洗礼式はありませんでしたが、特にうれしかったことは施設におられる大先輩の結城珠子さん（88才）と古沢延さん（89才）のお二人、マリアこまくさ保育園の先生たちが大勢参列されたことです。各先輩と先生方の晴れやかな御挨拶に、今日、復活の日に神様から送られたお恵みとも感じます。

子供たちが玄関で手渡すタマゴを受け取ながら聖堂前は家族・友人たちのグループがいくつも出来、おしゃべりを楽しんだり笑顔あふれる広場となりました。

祝賀会場のヨハネ館は、神父様と子供たちのテーブルを中心に、囲んだ6テーブルも8人掛けが10人掛け、立ち席と合わせて総勢80人の超満員。信者さんから寄せられたたくさんの御馳走を頂きながら談笑、談笑。最後に恒例千原神父様の大好きな「マラナタ」をウクレレの伴奏で大合唱となり楽しい一時を過ごしました。準備・後片付に当って下さった方々に感謝いたします。

四旬節黙想会「使命として・信仰として生きる」

四旬節黙想会講話が2月25日(日)ミサ後、埼玉県上福岡教会のグエン・ゴン・ホアン神父様により行われました。神父様はベトナムの方で難民として日本に来られ神父様になられました。その経歴と今黙想会テーマについて下記のように話して下さいました。

ベトナムはもともと農業でとても豊かな国でした。しかし、ベトナムを支配しようとする国がいくつかあって、たくさん戦争が起こりました。一番大きな戦争は1960年から1975年まで続いたベトナム戦争で200万人以上の人達が犠牲となりました。戦後、食べ物も十分になく身の危険が迫ったことから両親は国を出ることを決め、最初に5歳の私と12歳の姉はボートピープルとして出国しました。1983年、何月何日かは覚えていませんが夜中の1時頃両親に起こされ、父は私に「今からお姉ちゃんの手をしっかり握って海岸まで走りなさい」と言われ、私は姉の手を握り海岸まで走り、今、ニュース等で見られる北朝鮮の漂流船のような小さなボロイボートに、着の身着のままで乗込みました。その時、約100人位の人達がボート乗っていました。

特に、行き先が決まっていたわけでは有りません。とにかくどこの国でもいいから自由の国へ目指していました。船は十日間海の上。私が生き延びたのは母に渡された小さな袋に入った砂糖と3日分のおにぎりでした。少々の海水をコップに入れ半分以上砂糖を入れて混ぜ、それを唇に浸し、おにぎりはほんの一握りづつ食べていました。そして食べ物も飲物もガソリンも全て無くなり当時の大人の人達は死ぬ覚悟だったと思います。その時偶然にも大きな船と出会い食べ物とガソリンをもらうことが出来ました。そしてインドネシアのガラン島という島まで案内してくれて、翌朝、200m位ガラン島という島が見えてきたとき大きな船はどこかへ行きました。ところが、大きな船がどこかへ行ったときに今度は海賊が私達の船に乗り込んできました。6人位の人達が長い銃を持ってネックレス、指輪、金銀を強要され渡さないと行かせない!と言われみんな渡すと解放してくれました。当時は海賊船にあえば5艘に1艘が助かるか、助からないか!生と死の境目でした。ある難民船は女性がレイプされたり、子供が殺されたり悲惨な状況もありました。私の船は海賊にあいましたが運がよかったのは台風にあわなかったことです。

ガラン島について、私と姉は2年間難民生活をしましたが当時両親がいないのは私と姉だけでした。「小学6年生の女の子が5歳の男の子の母代りとして面倒を見るということを想像してみて下さい。今でも私は母よりも姉に頭が上がらない。本当に姉に感謝いっぱいです。

その後、父と兄もボートピープルとしてフィリピンのパラワンという所で難民生活を送っていました。私の母と妹もボートピープルとしてマレーシアという所で難民生活を送っていました。私の家族は三つに別れてそれぞれの国の所で難民生活を送っていたことは本当に奇跡と思いました。そして姉と私は1年間インドネシアで過ごしアメリカに行く予定だったのですが、シンガポールの空港の所で政府の人が私の姉に「貴方の両親の名前と兄弟の名前を書きなさい」と言われ、その人たちが調べたら「父と兄はもう日本にいると」いわれ、私達はもう1年待ち7歳の時1985年11月宮崎県の西都市カトリック教会へ来ることが出来、イタリア人のヨハス・ピッチ神父様のもとで、教会の中で父と兄と姉と4人で過ごすことができました。

最後に母と妹が、私が小学校4年の時に日本にきました。母が日本に来る前、私は学校でいじめに逢い1ヶ月位不登校でした。顔は日本人に似ているが名前がカタカナでいじめられていました。また母がいない参観日や運動会はすごくさびしかったです。そんないじめにあった私をヨハネ・ピッチ神父様は学校に連れて行って先生達に話してくれました。本当にヨハネ・ピッチ神父様に感謝でいっぱいでした。それは、苦しんでいる私の事を学校の先生に話してくれたからです。母と妹が日本に来て一家そろって暮らすようになり毎日が幸せな時間でした。学校も楽しくなり、小学5年生の時、これまでの神父様の背中を見て、自分も将来神父になって人のために役に立ちたいとヨハネ・ピッチ神父様に相談しました。そしてヨハネ・ピッチ神父様は私が神父になる思いを受けとめてくれました。そして私は大分教区宮崎小神学校に入ることになりましたが、その前にヨハネ・ピッチ神父様がガンでなくなりました。私はショックでとても悲しい日でした。その後、神言会という修道会に入りたいと思い高校は長崎のルドビコ小神学校で3年間過ごしました。

そして、高校卒業後、名古屋の大神学校で過ごしながら

南山大学に通い勉強し将来本当に自分は司祭として歩むことが出来るのかと考えながら過ごしていました。しかし、一旦大神学校を離れ、自分が出来るところまで奨学金を借りながら大学生活を送っていました。そして、大学卒業後、奨学金を全部返してもう一度司祭の道を考え黙想し6年前にさいたま教区の神父になりました。

これまでいろいろな道を通り最終的に神様がこのさいたま教区に導いて下さいました。今、本当にうれしいと思うことは、これら多くの経験をさせて頂いたことです。これも本当に神様の導きとご計画だと思います。

3年前、アメリカにいる私の叔父さんは神父ですが、日本にはじめてきて、私も初めて叔父さんとお合いし一週間一緒に私のいる上福岡教会で過ごしました。叔父さんによると、父の母の方の兄弟・姉妹・親戚を司祭とシスターを合わせると53人いることをお聞きした時、私は何度も疑問と同時にビックリしました。それぞれベトナム、フランス、カナダ世界各地にいるそうです。そう考えると私が生まれる前から神様の計画だったと思います。

以上が私の経歴ですが、これまでいろいろな経験をさせて頂きました中で1番大きかったことは神父になってからの出来事で東日本大震災でのボランテァです。皆さんもニュース等で見た時心に痛みを覚えたことと思いますが、それをまじかに体験した時、本当に神父になってよかったと思いました。それは自分が福島に行って信者さんでない方々と出会い、そして寄り添い、すごくその大切さを学びました。

これから皆さんと本題の黙想会に入ります。レジメに書いてある「使命として、信仰として生きる」です。

◎善い業を行って生きる

A:今、兄と共に神父になり周りの人から見れば母は幸せ者、私達は幸せだと。その幸せにとどまってはいけないと言うことです。良い業とは神様が私達のために予め備えて下さった人生の目的です。苦労があるともそれを生きてこそ、自分の本当の命を生きることが出来るのです。

◎思慮深くふるまう

B:『万物の終わりが迫っています。だから、思慮深くふるまい、身を慎んでよく祈りなさい。ペトロの手紙1　第4章7節』　東日本大震災。世界各国での大震災があり日本はダメ、世界はダメ。そうではありません。万物を終わらせるのは神様です。人間の私達では有りません。私達が住んでいる世界は良いものとして神様が作られた。戦争、森林伐採などで地球を悪くしてしまう。私達人間のせいなんです。万物の終わりの日を思慮深く生きるとはこの世の事で騒々しく生きることを止め、この世に対するみ心を遂げたもう神様を静かに信頼し、日々、神様との交わりの中に身を置いて祈りの生活を送ることです。

私達が住んでいるこの地球は神様からのプレゼントです。最初はとてもいいもの。人間は自然との調和を考えていかなければならない。

◎主に委ねよう

C:『それをここに持ってきなさい。マタイによる福音書第14章18節』東日本大震災のボランティアをした時に、この言葉がすごく頭によぎりました。たくさんの人たちが体育館、公民館に避難していました。その時私達は何をすればいいのか?目の前に倒れている人を貴方はどうしますか?と問いかけているのです。マタイによる福音書第14章18節に5000人を超える会衆の必要を満たすのに、五つのパンと二匹の魚は、何の役にも立たないかのように思います。同じような絶望を私達も味わっています。自分など何の役に立つか、こんなことをしても無意味ではないか?そのような逡巡を断ち切り御言葉に身をゆだねよう。

『それをここに持ってきなさい』と主は言われます。主が求めておられることは、私達の力ではなく信仰なのです。信仰を持って、私達の賜物を御手に委ねましょう。必ず主はそれを受け取り、神の新しい祝福の源泉として下さることを信じ捧げものをし奉仕しましょう。東日本大震災はそれです。大きなことは出来ませんけど寄り添うことは出来ます。それだけでも心が通じるんです。イエス様はそういう小さくされた人のそばに寄り添って歩んでいたんです。

自分の持っているタレント、持っている物なんでもいいんです。そうゆうとき分かち合うことが大切だと言うことをイエス様は私達に語っています。聖書を読んで全部理解できる人はいません。でも、わからないままでいいんです。日常生活の中でなにか福音的なものに触れた時にそこに信仰の喜びがあります。私は東日本大震災のボランテァをしてこのマタイの5000人にイエス様がパンと魚を与えたこと。そこに学ぶことが出来ました。

◎証びとになる

D:『地の果てに至るまで私の承認となる。使徒言行録1章8節』　神の証びとになるとはどういうことでしょうか?私達、この悲惨さに満ちた世界に、そして悩みと労苦の多いすべての人の人生に、それでもなお神様がいまし、イエスキリストの救いがあるのだということの生けるしるしになると言うことです。イエス様は東日本大震災に座って待っておられる。私はすごくそれを感じられました。イエス様は私にそれを呼び掛けていたんです。私は、いろんな仮設にいる人達と寄り添って歩むことによりそこにイエス様を見出すことが出来ます。皆さんはそれぞれタレントを持っています。人生の目的もあります。その中で自分の出来る範囲ですることが大事です。私達をそのようなものにして下さるのは聖霊です。聖霊は私達の心のうちにキリストを住まわせ、どのような苦難の中にあっても、忍耐と愛と希望を持たせて下さいます。イエス様と共に歩ませて下さいます。その忍耐と愛と希望こそ、神なき、望みなき人々に生ける神の存在を示すしるしとなるのです。

◎弟子たちのためのイエス様の祈り

E:『わたしがお願いするのは、彼らを世から取り去ることではなく、悪い者から守って下さることです。ヨハネ福音書17章15節』　それは本当にとても励みの言葉です。現在を生きる日本の中には、いろいろな誘惑があります。特に人間関係の崩れなど。その誘惑を私達は乗り越えていかなければなりません。イエス様は御国の子らが不信仰な世にあって非常に困難な闘いの生活を強いられることを御存じでおられます。それにも関わらずイエス様が祈られたことは、私達が不信仰な世を逃れることではありませんでした。その中に留まってしかも不信仰に染まることなく、御国の子として信仰に生き抜くことでした。私達はいかに信仰をもって生活を送るか、偽りの世にあって偽り者にならぬこと、空しき世にあって確かな希望を持ち続けること、そのように御国の子らが世の戦いに勝利することによって神の栄光が表わされることこそイエスさまの私達に対する願いなのです。　（記:柴田　博）

四旬節・復活祭によせて

祈りと祈り方を知ってる幸せ

丹野一子

終活を気にする年になって、昔は何をどう祈っていたのだろうかと考えてみたが、いくら考えても何も思い出せない。どうしてなのだろう?

思い出す「よすが」として、自分の教会歴をたどってみた。

山形教会（洗礼、堅信、結婚）
東京都清瀬市清瀬教会
宇都宮市松が峰教会
北九州市小倉教会（長男　次男　長女幼児洗礼、長男初聖体）
札幌市北一条教会（次男初聖体）
山形教会（長女初聖体、夫洗礼）
広島市幟町教会
大阪市吹田教会
明石市明石教会
山形教会

見知らぬ土地での慣れない生活に戸惑い、いろいろ苦労した事を思い出す。しかし、教会に関しては、どこの教会に行っても、いつものミサにあずかり、同じ本で祈り、同じ聖歌の本で聖歌を歌った。どこでも何も戸惑うことはなかった。昔も今も同じことを同じように祈ってきたのだと思う。

日々、生活するうえでは、当然、心配事、困ったこと、迷うことは、たくさん出てくる。そして、その都度、祈ってきた。

考えてみれば、祈りを知り、祈り方を知っていることは、なんと幸せなことなのだろう。しみじみ思い、神に感謝である。

これからは、アベマリアの祈り、特に「今も、死を迎える時も、お祈りください」に、心をこめて祈っていきたい。

「訪れること」

マルグリット・マリー・アラコク　村川智美

今年も2月14日の灰の水曜日から、四旬節の季節になりました。

私が、山形教会を訪れ、洗礼を受ける準備を始めたのは、9年前の2月で、山形教会での初めてのミサが9年前の灰の水曜日の御ミサでした。そのためか、毎年、灰の水曜日を迎えると初めてのミサを思い出します。そして、6年前に洗礼を受けてからは、四旬節の間、洗礼を受ける前や受けてからのことを思い起こす機会が増えるように思います。

昨年、今まで働いていた病院から、訪問看護・リハビリを行っている事業所に移りました。言語のリハビリに係ってから20年近くになりますが、言葉の障害を持った方たちがご自宅に戻られた後、あるいは施設などに入所された後、どのように生活されていて、言葉の障害があることで、どんなふうにお困りなのかを知りたかったことや、障害を持った小さいお子さんたちに出来ることがあれば、ご家族と一緒に係わりたいと考えていたので始めました。

今年、1月に元の職場に戻り、病院内と訪問の仕事を行っています。進行性の難病を抱えている方、左右両方に麻痺があり身動きのできない方などにかかわる機会が増えました。そんな中、ある時ふと「訪れる」意味を考えはじめました。病院で「訪れて」くださる方々をまつだけではなく、私自身が「訪れる」機会を与えて頂いたのではないかと、ある時思いはじめました。

障害を持つ方たちの悩みや、苦しみを本当に理解することは決してできません。けれども。訪れ傍に寄り添うこと、何か少しでも一緒に楽しみを見つけ、生活の中で出来ることを探していければと願いながら訪問を続けています。

この四旬節の間、今までとは違う気持ちで病気を持っている方たちと共に生きていくことを考えています。

ともに復活祭で洗礼を受けた息子とともに感謝しながら信仰の道を歩んでいきたいと思っています。

「私の家の窓から」

梶西頼子

私の家の窓からは、道路があってその並びに家の駐車場（4台分のスペース）があります。

窓からながめると、色々思い出されます。

数十年前私の心の危機的な暗闇時代（少しおおげさかもしれないが）から、神さまが私の魂に触れて下さり、そして私が神さまの言葉に答えるような（また、少しおおげさかもしれないが）気がしました。それから、少しでも多くのことを学んだような気持でいます。

私は以前、共同祈願に「人が皆なかよく過ごし、山形教会で力をあわせ、前進していくことができますように」と。まさに、昔も今もそれは変らないことだと思います。敬虔なメッセージを強化している自分がいたり、毎週日曜日のミサの中で宗教的な使命のうちに、矛盾と危機を相変らずですが時々感じてしまいました。これの繰り返しです。が、「突然大丈夫なんだ」と自分勝手に思うようになり、信仰は私にとって何なのだろうか?今でも時には考え、時には悩み、こんなことではいけないと思いつつ日々葛藤しています。ほんの少しですが、神さまの存在を感じたとき、自分の今の気持ちが戻ってきたように思えます。赤ん坊がおばあさんの腕に抱かれた時、少しでも人生が変わってもいいのではと、人を称え、感謝するわけがきちんとあるのと思うのですが。

ルカによる福音書　第9章25節の中に、「人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の身を滅ぼしたり、失ったりしては、何の得があろうか」とあります。愛というのは誰にとっても、いつでも最大の報いだと思っています。

何か私の薄い信仰心を伝えたような気になってしまいました。

「わたしの旅日記から」

阿部康子

4月11日から3週間余り、夫と共にオランダ、ベルギー運河とライン川、モーゼル川のリバークルーズに出かけました。客船は全長110m、1700トン、定員137名のセレナーデ号です。ヘルシンキを経て、ベルギーの首都ブリュッセルから乗船し、川沿いにオランダ、フランス、ドイツ、ルクセンブルグを訪ね、スイスのバーゼルまでの旅で、川の高低差を克服するための30か所の水門を通過しながら毎日の停泊先を観光するのんびり、ゆったりの旅でした。航行していると、教会を中心に街々が作られた歴史があるため、爽やかな新緑を背景に教会の高い塔が次々に見えてきます。そして、一つの教会の塔から鐘の音が聞こえると、船の航行に合わせたかのように次の教会も次の教会からも美しい鐘の音が続いて響き、まるで教会から呼びかけられているように感じる日々でした。いくつか印象に残った点をあげてみますと…。

○オランダでは、ハーグにある「青いターバンの少女」や「デルフトの眺望」で知られるフェルメールの作品が見られるマウリッツ・ハウス王立美術館を訪ねました。その真横にある中世の建物が国会議事堂（ビネンホフ）で、広場では市民も観光客もアイスクリームを食べながら寛いでいます。偶然登院してきた首相が私達に気軽に挨拶し市民との近さに驚きました。ハーグは政治や行政の中心地で国際司法裁判所もあり、世界の良心と称えられた安達峰一郎博士（山辺町）が、アジア人初の所長となったことがガイドから説明され誇らしく思ったものです。

○ドイツで訪れた600年以上かけて建造された壮麗なゴシック様式のケルン大聖堂は、12世紀後半に東方三博士（マタイ福音書2）の聖遺物が安置されたことが世界遺産認定の決め手になったとのこと。巡礼者や大勢の観光客は、入り口でバッグの中を検められてから入堂、奥に進むと厳重に鉄格子に囲まれて三博士の黄金の棺が安置されていました。

この三博士が去った後、天使のお告げがありヨセフが幼子とその母を連れてエジプトに避難したとマタイが書いています。数年前に行ったエジプトのオールドカイロで、地下にある教会がその場所だと案内されたことを思い出し、一つにつながる体験となりました。また、各地で街路樹のマロニエが満開でしたが、マロニエの花は天に向かって咲いているように見えます。それが、教会や家庭で灯されるキャンドルのように思えることから、ドイツでは蝋燭のようにまっすぐな人というたとえ（日本では竹を割ったような性格という意味）があると聞きました。また、このケルンで生まれた最古の香水はケルンの水と呼ばれ、フランス兵が祖国に持ち帰ってケルンの水という意味のフランス語、オーデコロン(eau de Cologne)となったそうです。

○ベルギー第2の都市アントワープのノートルダム大聖堂では、一瞬を切り取ったようなルーベンスの絵画、キリストの昇架、降架、聖母被昇天に心を打たれました。大聖堂の前には「フランダースの犬」のアニメで知られるネロとパトラッシュの像がありましたが、当時、絵を見るには高い観覧料が必要で画家を目指す15歳の貧しいネロには見ることが叶わなかったという背景の原作とともに、教会の歴史の変遷も思いました。

旅程が進むにつれて川の両岸のブドウ畑の緑が次第に濃くなり、川辺で家族が寛ぐ姿や、白鳥が巣づくりしている様子、ツアー客の一人から「もしかしてクリスチャンですか。私は大坂豊中教会所属です」と声をかけられたり、さまざまな驚きと発見、喜びがありました。帰宅して教会でごミサに預かり、心からほっとして、いるべき場所に帰ってきたことを実感しました。

2018世界祈祷日

日本聖公会山形聖ペトロ教会

2018（平成30）年3月3日、午後1時30分より日本聖公会山形聖ペトロ教会（涌井安福司祭）で行われました。

世界祈祷日は、多様なキリスト教の伝統を共有するキリスト者女性により、1877年にアメリカの女性たちが移住者や抑圧されている人達を覚えて始まりました。2度の世界大戦の経験から地球規模の視野を持って和解と平和を求める祈りによる世界的運動に発展しました。毎年3月第1金曜日にテーマに沿って祈り合い、世界的なネットワークを持つ女性たちと祈りと行動を続けています。今年度の祈祷式文は、スリナム式文編集委員会によって作成されました。スリナム共和国は南アメリカ北東部アマゾン川流域の生態環境地域です。（2018世界祈祷日式文より）

その活動記録を見るに、世界的規模の活動に目を見張るものがあります。

この日は、山形市内の聖ペトロ教会、六日町教会、本町教会、カトリック教会、南部教会、山形キリスト教会と天童教会の7教会、53名の方（カトリック教会10名）が参加しました。
礼拝の招き、神のことば、告白と許しを求める祈り、とりなし、を各教会が先唱を担当し全員で応答するなかに賛美の聖歌が流れ、涌井司祭のメッセージ（説教）があり誓約と派遣の祝福で終わりました。

終了後、各教会の参加者紹介と取組報告があり散会となりました。取り組みについては各教会とも東日本大震災への援助が多く感じられました。

総会を終えて 新体制始動

カトリック山形教会　信徒総会
2018年3月4日（日）

総会にあたり、信徒の皆さんにどのようなメッセージを伝えればいいのか毎回の悩み事です。挨拶冒頭でお話したことは、「高齢者。それがどうした。」でした。どの教会も抱えている信者の高齢化です。これは避けては通れないことであり、私自身、数年後には「高齢者」という扱いになります。しかし、高齢者とそうでない方のボーダーラインは「信仰」のうえでは

何も存在しないのではないでしょうか。私たちの世代はまだまだ年上の方々から多くのことを学ばなければなりません。今回、規約改正に伴い、山形教会に所属する全ての信者の方々に、いずれかの部会に所属するようお願いをいたしました。実質的な活動は体力的に無理があることは承知していますが、高齢ということで所属を遠慮することはないのです。教会の仕事を通して「神様」に使えることに年齢は関係ないのです。むしろ、協力を必要とされていることを感じてください。自分から必要とされているところから離れていかないでください。私たちはひとつの共同体です。ともに「神様」のために働いてください。そして、その喜びを感じられる山形教会になれるよう任期を務めたいと思います。

昨年12月に行われた、「臨時総会」で小教区規約改正が承認され、この総会以降、新たな体制により小教区の運営が始まります。ここで、総会で承認された新たな役員をご紹介いたします。

小教区評議会　評議員
　評議員役員　小林雅人　矢野淑子　柴田　博
　各部会の代表者
　総務部・沼沢敬志　典礼部・飯島千賀子
　信仰養成部・小笠原明子
　広報部及び財務部・柴田　博
　（特別部）墓地管理部・沼沢忠一
　会計監査　石山敬治　笹田繁

任期は2年となります。皆さまと協力し、山形教会において福音宣教の使命を果たしていくために務めてまいりますので、よろしくお願いいたします。

総会での一番の関心事の「会計関係」については柴田さんの説明をお読みください。　（小林雅人）

総会時の会計関係質問について

3月4日の信徒総会時に「小教区基金を建物の修繕に使用してもいいのですか?」との質問がありました。あらためて説明をさせていただきたいと思います。

1.　本来建物等の修繕は経常支出の維持管理費、施設設備修繕費です。
（総会資料に添付したように経常収入だけでは一般会計予算が成り立たなくなっています。小教区基金は一般会計の補助会計的位置づけにありその使用は問題ありません）

2.　開発資金は聖堂改修以後、建物、構築物の小修繕に使用してきましたが、本来は開発の名の通り、経常費と別にした特別な行事・活動及び増改築、模様替え等の大修繕に使用することを目的に資金として設けられたものです。

3.　どの会計を使用するかは、現在の教会会計全般をみて判断する必要があります。各会計の費途目的に合せた使用方が基準となりますが、それに伴う貯蓄額の比較、またこれから先の修繕予定など中長期計画を想定し使用していかなければなりません。現在の各教会会計の費途目的に合わせた貯蓄高は強いて言えば小教区基金を除いて、それを全うする形にはなっていません。

平成28年度末の年度繰越金に平成29年度の収入予算を加え、それより支出予算を差引いた残額（平成29年度末繰越金）をみますと開発資金は1、583千円。小教区基金は2,543千円となります。

これに突発的に屋根瓦の修繕約247千円の出費が必要になりました。前述した開発資金、小教区基金のどちらかを使用しなければなりませんが、繰越金を考えた場合、開発資金を温存する必要があります。

今年度は聖堂南壁の修繕とヨハネ館の雨水処理を計画していますが、その後においても聖堂改修後約10年近く経過し床の損傷個所も目立ち始めました。また聖堂の二階部の屋根も前回塗装から15年位は経過していると思います。また神父様から話のあった6年から10年先の司祭館の新築について現実的な話も始まるものと思います。

ここ2,3年司祭館の修繕等が目立ってきています。加えて先に話した聖堂の修繕もあります。先に大きな工事が控えている場合その時期まで、必要な小修繕は出来るだけ早めに終了しておく事が大事と思います。また、前述したように支出については、先を見越しての計画をたて、全会計で運用していかなければなりません。　（会計　柴田）

素晴らしい成人式

山口海人さん

1月14日、ミサの中で成人の祝別がありました。千原神父様より「今年成人になられた方はおられますか?おられましたら前に出て下さい」との呼び掛けに最初は誰もいないのかなァと思いましたが、山口海人さんが一人静かに出てきてくれました。千原神父様より心のこもった祝別のことば、それに合わせて信者の皆様が山口さんと一つになっての答唱が静かな聖堂のなかにこだまする素晴らしい成人式になりました。新しい出発を皆んなでお祝いをしたいと思います。

1月14日（日）、ミサ後に「お別れ」のあいさつをするブライアン神学生と通訳をする千原神父

― 山形に別れ ― ブライアン神学生

「置かれた場所で咲きなさい」。
わたしが宣教師として日本に派遣された時に、この言葉をわたしの心の中にずっと納めています。

自分の国ではない、この地で宣教師をするわたしが「置かれた場所で咲きなさい」という言葉に導かれています。

この言葉のお陰で、わたしは体験した新しい事に心を開き、日本の文化、人々、食べ物、そして言葉も抱くことができたのです。全ては、わたしがこの国で、特に山形で美しく咲くことができるためです。

雨季と乾季のみの季節で育ったわたしにとって、四季を経験するのは、大きな心の喜びでもあります。この素晴らしい事を体験させてくださった神さまを仰ぎ見ずにはいられません。

季節により、彩りが変わる木々と山々、花たち、庭と雪。これら全てを目にしたこと、それが、わたしが変わる契機となりました。この機会をくださった神さまにはとても感謝しています。

優しく愛してくださる山形の皆さん、ありがとうございます。嬉しいです。皆さんの存在と友情はわたしを咲かせてくださいました。身分、立場、人格にかかわらず、隔たりなく誰でも受け入れる人として、皆さんはわたしを咲かせてくださいました。わたしの人生の一部になるために、ここにいる皆さんに感謝しています。

特に千原通明神父さまに御礼を申し上げます。
神父さまは、わたしの父のようであり、また、わたしの兄弟でもあります。わたしに多くのことを教えてくださって、ありがとうございます。また、老人ホームで出会った、おじいさんとおばあさんの皆さまにも感謝しています。皆さまはわたしの人生の先生たちです。

人生とは過ぎ去るものですから、全てを尽くして意味と目的のある良い人生を送ることを皆さまに教えていただきました。

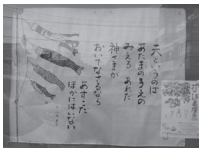
わたしたちは愛する人といつまで一緒にいられるのか分からないので、常に愛することの大切さを皆さん方に教えていただきました。わたしたちが覚えられるのは、わたしたちが愛する人々、家族、友人、隣人をどれ程愛したか…、どれ程与えたか…、という事なのです。ですから、できるだけ全てを尽くして与えるのです。皆さんの嬉しさと笑いのお陰で、たった少しの時間でも一緒に過ごせたこと、それがどれ位い大事なのか皆さんがわたしに気付かせてくださいました。

皆さんに本当に心から感謝しています。
互いに良い印象を残して、わたしから習った何かを落ち込んでいる時に、励ましが、必要な時の支えになれたら嬉しいと思いながら…、心から出発したいと思います。

今はお別れではなく、わたしたちみんなにとって新しい始まりなのです。いつかまたそれぞれの道がすれ違うかも知れません。その時は互いに人生について更に色々なことを学んでいくことを期待しています。このようにいたら意味と目的をもって賢く人生を送る事ができると思います。

生きて、愛して、笑ってください。
神さまの祝福をお祈りしながら…。
皆さんに改めて感謝申し上げたいと思います。

編集後記
教会誌に皆様の声を



教会誌は色々な役目を持っています。
改めて内容を見ますと、復活祭、被昇天祭、クリスマスを中心に、それらに準ずる黙想会、洗礼式（受洗者の紹介）、そして祝賀会、その年々の行事に関したことが掲載され、その発刊は、教会全信者さんへお知らせ、文書での分かち合いであり、また教会の歩み（歴史）を継続記録するものともなります。

しかし、それらに加えて普段皆様が話されてるような「あの話はよかったね」とか「面白かったね」のようなことを載せられたらこれまでに増して自分たちの教会誌になるのではないでしょうか?昨年4月から今回までの各刊に信者さんに協力をお願いして記事を頂いています。感じたことや、思い、好きな言葉、俳句・詩等を紹介出来る信者さんのページをと思っていますが、具体的な募集方法等が決まりましたら皆様の御協力をお願いできたらと思っています。沢山の声を是非聞かせて下さい!　　広報部